

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2003 年度研究成果報告書

研究科名	社会学			研究科	社会学	専攻
指導教員	所属・職名		氏 名			
	社会学部教授		間々田 孝夫 印			
自然・人文の別	自然	<input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	共同	名
研究課題	1980 年代の日本の経済社会，特に消費，イノベーション，バブルの経済社会学的研究					
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
	社会学研究科社会学専攻 博士課程後期課程 4 年		水原 俊博 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
研究期間	2003 年度					
研究経費	200 千円					

**研究の概要** (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、1980 年代の日本経済の経済社会学的研究を課題とし、博士論文の作成を目的とし、取り組みました。本研究の概要は以下ようになります。80 年代の日本経済は記号消費によって成長したと一部でいわれてきました。本研究では、記号消費の理論家である、ボードリヤールの消費社会論の再構成を行い、その理論モデルを、80 年代の日本経済のマクロ統計から検証し、法人需要を検討します。さらに、記号消費をイノベーションの視点から捉え、資本主義経済の成長への記号消費の貢献の程度を検討し、また、消費者と供給サイドとの関係から、イノベーション過程を議論します。最後に、バブルについては、価値などの視点から検討します。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[ 記号消費 ] [ イノベーション ] [ 資本主義 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、記号消費を中心としたボードリヤールの社会理論の再構成、それをモデルとし、1980年代の日本経済を対象とした検証、及び、法人需要の重要性の指摘とその考察、記号消費のイノベーションの視点からの検討、消費論的な立場からのイノベーションの考察、さらに、バブルの経済社会学的考察からなります。そして、これらを博士論文としてまとめるというものです。しかし、結論からいえば、この計画は昨年度において達成されたとはいえません。本年度の研究経過について、以下、確認しながら説明します。

2003年度(昨年度)の4月は、2002年度から引き続き、ボードリヤール(Baudrillard, J.)の社会理論の再構成に取り組みました。それによって、査読論文を作成し、掲載されました(2003,「ボードリヤールによる古典的マルクス主義の理論的補完——記号論的消費社会論を中心に」『経済社会学会年報』25: 160-72.)。本来ならば、この作業に続いて、2003年度5月からは、イノベーション研究に移行するはずでした。しかしながら、上記の論文を作成する過程で、ボードリヤールの社会理論の再構成という、本研究の根本にかかわる部門が、予想以上に遅滞し、また、諸概念の吟味などについて問題が山積していることを痛感し、5月以降も、ボードリヤールの文献の吟味に、継続的に取り組みました。こうした作業の過程では、Kellner, D., 1989, *Jean Baudrillard*, Stanford Univ. Press など、海外の多くの先行研究をも吟味しました。それによって、ボードリヤールの社会理論を精緻に、特に、博士論文に相応しい水準で、再構成することは、ボードリヤールの邦訳文献を吟味する作業だけでは、もはや不可能であると思に至りました。そこで、当初は大学図書館で、夏以降は、SFRの研究費などで入手した未邦訳のものを含むボードリヤールの仏語文献を吟味する作業に、年度を通じて、没頭しました——ただし、ある程度の原著の吟味は当初、計画していました。その結果、それ以外の作業、たとえば、イノベーション研究、それに関連する事例研究、バブル論については、大学図書館、他大学の図書館などで資料、文献を収集するなどの作業しかできませんでした。ただし、この作業は年度を通じて行いました。とはいえ、その結果、これらの作業から、十分な研究成果をあげることはできませんでした。

次に、博士論文の執筆状況について説明します。博士論文は、立教大学社会学部の紀要である『応用社会学研究』の論文——これについては後述——を脱稿後、つまり、2003年度12月から、本格的に開始しました。なお、前段で述べたボードリヤールの原著の吟味は、この時期、博士論文の執筆の過程において行いました。年が明けて2003年度3月末現在、12万字前後(全体の1/3の分量)が、ほぼ完成に近い水準で完成しています——博士論文の最新の完成状況については、本研究成果報告書の「様式4」の<研究期間終了後の展望>を参照してください。

さて、以下では、以上のような研究過程における研究成果について、本研究成果報告書の「様式3」の研究成果にあげた論文と報告について、簡単に要約し、また、それらの研究の意義について説明したいと思います。

## 【紀要論文】

水原俊博,「初期ボードリヤールにおける資本主義仮説の検討」『応用社会学研究』46, 2004: 117-36. 執筆期間: 2003年度9月~10月末, 約37000字(A4, 22枚)。

この論文は、ボードリヤールの初期の文献、つまり、*Le système des objets* (『モノの体系』)、*La société de consommation* (『消費社会』)、*Pour une critique de l'économie politique du signe* (『記号の経済学批判』)、*Le miroir de la production* (『生産の鏡』)、*L'Échange symbolique et la mort* (『象徴交換と死』)の4つの原著を吟味して、資本主義についての仮説を取り出すものです。端的にいえば、ボードリヤールは、この4つの文献において、消費者が資本、あるいは、生産の秩序によって、統制=管理され、それを通じて、資本主義が延命していることを主張しています。こうした主張は、それぞれの文献において、それぞれ異なる文脈で展開しているため、仮説として取り出すのは、きわめて困難でした。たとえば、『記号の経済学批判』においては、マルクス主義の理論を補完する過程で、『生産の鏡』では、マルクス主義を批判する過程で、『象徴交換と死』では、後にポストモダン論として展開することになる議論の過程で、資本主義についての仮説を展開しているため、それぞれ展開されている文脈に十分に配慮しなければ、仮説を取り出すことは困難でした。ところで、ボードリヤールによる資本主義についての仮説を、文献を吟味して再構成する先行研究は、内外を問わずこれまでありませんでした。これは、こうした研究が無意味であることを意味しないように思われます。むしろ、ボードリヤールの消費社会論は、消費行動の一側面を、単に説明するものではなく、資本主義という経済システム、あるいは、生産の秩序とのかかわりで、消費行動を説明しています。したがって、資本主義についての仮説をボードリヤールの文献から取り出す研究は、ボードリヤールの消費社会論、さらには、社会理論を精緻に理解するためには、欠かすことのできない作業だと思われます。その意味では、ボードリヤールが、精力的に消費、資本主義について議論した、上

**研究成果の概要 つづき**

記の4つの文献を吟味し、資本主義についての仮説を取り出した本論文の研究には、学説研究上、意味があると思われま。また、本研究とのかかわりでいえば、この仮説こそが、80年代の日本経済から検討されるものであります。したがって、この仮説を精緻に再構成することは、本研究を進めるためには、是非とも必要でした。だからこそ、その他の作業よりも、この作業を優先的に進めたといえます。なお、この論文の執筆に当てたのは2003年度の10月でしたが、原著の吟味については、同年度の8月～9月にかけて行いました。また、字数は37000字であり、通常の論文の分量でいえば、3倍の規模になり、規模だけでいえば、本論文は論文3本分になります—個人的には、内容的にも、論文3本に相当すると自負しています。

**【査読論文】**

水原俊博、「差異，差異化，差異の生産—初期ボードリヤールの文献に準拠して」『経済社会学会年報』26，2004，査読中。執筆期間：2003年3月度～2004年度4月末，約15000字（A4，12枚）。

本論文は、後述する立教大学社会学研究科社会学専攻研究例会での報告の概要を発展させて博士論文の一部として完成させたものを、論文としてまとめたものです。簡単に内容を要約すると、これは、ボードリヤールの記号論的消費社会論におけるキー概念である、差異，差異化などについて、原著から厳密に検討して整理したものです。本論文では、特に、モノの物質的な働きである1次的機能，社会的地位などを意味作用するといったモノの働きである2次的機能が、ともに記号であることを確認し、それぞれについて差異，差異化について吟味しています。また、差異化を消費者の行動に、差異の生産を生産，流通などの供給サイドの行動として解釈しています。こうした差異，差異化などの概念を、ボードリヤールの文献から精緻に抽出する研究はこれまでなかったように思われます。これらの概念もまた、既存の研究では、頻繁に用いられています。その意味では、学説研究上、本論文には価値があるものと思われま。また、本研究は、博士論文において、ボードリヤールの社会理論の再構成の部門において、重要な部分を構成しています。なお、本論文の実質的な執筆期間は2004年度の3月～2004年度4月にかけてでしたが、文献を吟味する作業は2003年度の12月から行いました。

**【報告】**

水原俊博、「差異の生産とイノベーション—初期ボードリヤールの文献に準拠して」立教大学社会学研究科社会学専攻研究例会，2004.1.22。レジュメ：約15000字（A3，4枚）。

本報告は、前述の【査読論文】のベースとなったものです。ただし、本報告では、差異，差異化，差異の生産といった概念を検討して整理するだけでなく、それらを、イノベーションとの関連で検討しています。詳細をここで説明することは紙幅の都合上できませんが、端的には、モノの差異を生み出すこととしての差異の生産には数種類あり、それらを、経営学，経営戦略論における製品イノベーションについての分類から考察するというものです。この報告の博士論文での位置づけについては、前頁の冒頭で述べた「記号消費のイノベーションの視点からの検討」の部分の一部がこの報告に当たります。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

【査読論文】

水原俊博, 「差異, 差異化, 差異の生産——初期ボードリヤールの文献に準拠して」『経済社会学会年報』26, 2004, 査読中.

【紀要論文】

水原俊博, 「初期ボードリヤールにおける資本主義仮説の検討」『応用社会学研究』46, 2004: 117-36.

② 図書

なし.

③ シンポジウム

なし.

④ その他

【研究報告】

水原俊博, 「差異の生産とイノベーション——初期ボードリヤールの文献に準拠して」立教大学社会学研究科社会学専攻研究例会, 2004.1.22.